

この経済コラムが書籍になりました

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 土田 浩

この経済コラムの連載は、2018年4月の初回以来、丸3年になりました。それを編集して、この度、「埼玉から日本経済を語る」（埼玉新聞社）を上梓しました。この場を借りてご報告します。

私は、この5年間、武蔵野銀行グループの一員として、中小企業の経営者の方々をはじめ、県内の多くの企業・団体の方々とお話しさせて参りました。講演・懇談会・調査取材やプライベートな交流の場で、世界・日本・埼玉の時事問題などについて、ご意見やご質問を頂戴してきました。そうした貴重な声にお応えしたいという気持ちを込めて連載を続けています。

2018年と言えば、米中摩擦が、当初は貿易・関税問題の形で勃発した年。第二次大戦後の世界史上、1989年のベルリンの壁崩壊（＝米ソ冷戦の終結）と並ぶ歴史的転換点ではないかと感じています。その煽りもあって、日本では、2012年末から長く続いたアベノミクス景気がピークを迎え、事後的に景気後退期入りと認定されたのもこの年でした。いわば世界も日本も潮目が変わった年ということです。

そのときから書き始めたコラムの大半は、日本の経済・社会の先行きを考える上で、決して陳腐化していない題材だと思います。

本書は、3章の構成になっています。

第1章「日本経済の現状を俯瞰する」は、その時々々の経済の現状と展望や、議論を呼んだ経済政策への論評、経済学を援用した現代社会の洞察などです。私が長年取り組んできたマクロ経済の話題です。

第2章「企業経営と人の働き方・生き方」は、急激な時代変化の下で生きる企業の経営者や従業員に向けたメッセージです。人材開発やキャリアカウンセリングの経験を通じて得た私見を盛り込んでいます。

第3章「広角とズームの視点で日本経済をみる」は、海外との関係や世界各地の話題、および日本の地方や埼玉に焦点を当てた話題です。

本書は主として日本経済に焦点を合わせていますが、それらは皆、埼玉経済を考察するときの土台となるものです。2016年に上梓した「日銀からみた埼玉経済」の頃よりは、国民目線でストレートな物言いになったと感じていただけるかもしれません。

いずれの項目も、一話完結の短いコラムですので、目に止まった見出しのところから順不同で読んで頂ければと思います。

昨年来のコロナ禍で、苦境や多忙の真只中にいる方も多いと拝察しますが、そろそろポスト・コロナ時代の長期的視野にも目を配るときではないでしょうか。識者の間では、「ポスト・コロナ時代には、全く新たなことが突然起きるのではなく、コロナ以前のトレンドが加速する」との理解が広まっています。このタイミングで、これまで抱えていた経済・社会の構造的課題を振り返ってみるのも意味があるのではないのでしょうか。

埼玉や日本の将来に真剣に向き合い、思い悩んでいるの方々にとって、一つでも二つでも考えるヒントになればという思いです。埼玉県内の書店で見掛けるとき、お手に取って頂けたら幸いです。

